

櫛形町文化財調査報告書 No.22

横道遺跡

— 携帯電話用無線基地局設備設置事業に伴う発掘調査報告書 —

2001. 9

櫛形町教育委員会
ジェイフォン東日本(株)

柳形町文化財調査報告書No22 横道遺跡 正誤表
以下の誤りを訂正します。

○例言4. 誤：平成13年11月6日～ → 正：平成12年11月6日～

○写真図版6 第1号住居址出土の1・2が写真入れ替わり。

柳形町教育委員会

横道遺跡

——携帯電話用無線基地局設備設置事業に伴う発掘調査報告書——

2001. 9

櫛形町教育委員会
ジェイフォン東日本(株)

序 文

近年わが国では、IT革命の名のもとに情報伝達技術の発展には目を見張るものがあります。中でも特に個人間の情報伝達手段としての携帯電話の普及・発展は著しいものがあり、櫛形町内においてもすでに複数の携帯電話用鉄塔が設置されています。この度、櫛形町下市之瀬字横道地内において携帯電話用無線基地局設備が設置されることになりました。そこで設置工事に先だち、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

横道遺跡は、世界中で活躍する国の重要文化財「円錐形土偶」等で有名な鎧物師屋遺跡を望む市之瀬台地縁辺部に位置しています。現在では台地斜面を利用した棚畠が広がる地域ですが、今回の調査では、鎧物師屋遺跡のすぐ後の時代に暮していた縄文人たちの建物址が発見されました。一般的に知られる竪穴式住居と違い、平らな石を敷いたもので「敷石住居」と呼び、峠中地域で初の発見であります。しかも二時期の敷石住居と一緒に発見され、後の時代の人々が、前時代の人々が使った石を再利用したと思われる点が大変興味深い、非常に貴重な発見といえます。

このような狭小な土地の開発においても、失われる文化財をきちんと調査、把握することにより、これまで想像すらできなかった私たちの祖先の暮らしを垣間見ることができます。小さな調査の積み重ねが大きな発見へと繋がるのです。

このように、わが町の先人達の営みを解明する成果は着実に揃ってきており、私たちは先人達から多くのことを学び取ることができます。これらの資料は、町民が地域の歩みを学び、良さを次世代へと伝え、地域の未来を創生していく糸口として大きな意味を持つものといえましょう。今後は、このような限りない可能性を含む貴重な成果を、地元町民の学習の機会へと活用していきたいと思っております。

事業主体であるジェイフォン東日本株式会社には埋蔵文化財の取り扱いについてのご理解を頂き、惜しみないご協力のもと、円滑な記録保存を成し遂げることができましたことに対し、深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、今回の調査、報告書作成にご指導ご協力くださった皆様ならびに作業された皆様に対し厚く御礼申し上げるとともに、本書が広く活用され文化財の保護・活用に役立つことを願い序文と致します。

平成13年9月

櫛形町教育委員会
教育長 中込脩

例　　言

1. 本書は携帯電話用無線基地局設備設置事業に伴い、ジェイフォン東日本株式会社の委託を受け檍形町教育委員会が実施した、山梨県中巨摩郡檍形町下市之瀬69番地1号における横道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 檍形町教育委員会の実施した横道遺跡の調査事業費は原団者の全額負担による。
3. 本遺跡の名称は、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地として横道A～D遺跡が認識されてきたが、今回の調査成果により遺跡名を統一し、字名をとって横道遺跡とする。
4. 発掘調査は平成13年11月6日～11月27日に実施され、整理作業および報告書の作成は平成12年度、報告書の執筆は平成13年度に行った。
5. 調査組織および調査参加者は以下の通りである。

調査主体者	檍形町教育委員会	教育長 中込 勝
調査担当者	保阪太一（檍形町教育委員会 文化財主事）	
調査員	若林初美	
事務局	檍形町教育委員会生涯学習課文化振興係	
調査参加者	相川春美・井上ことじ・井上巴江・井上増美・入倉妙子・加藤由利子・川崎しげ美・神田久美子・小林美咲枝・桜田和子・桜田みさえ・鈴木アサ江・長沼豊子・生原浩美・深澤敬子	
整理作業員	飯久保初美・加藤由利子・神田久美子・小林美咲枝・生原浩美・深澤敬子・由井伴三	
6. 本報告書の編集は保阪・若林が行い、写真撮影および執筆は保阪が行った。
7. 発掘調査及び報告書作成において下記の諸氏から多大なるご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

今福利恵・笠原みゆき・齊藤秀樹・桜田保男・佐野 隆・中根勇明・三田村美彦・米田明訓
8. 本報告書に関する出土品及び記録図面、写真等は檍形町教育委員会に保存してある。

凡　　例

1. 遺構・遺物図版中における指示は次の通りである。
 - ・遺構図版中の水系レベルは海拔高を示し、単位はmである。
 - ・遺構図版中のスクリーントーン及びドットの説明は図中に示してある。
 - ・方位は磁北を示す。
 - ・遺物番号は本文・挿図・表で全て一致する。
2. 本書で使用した地図は、1：25,000地形図「小笠原」（国土地理院）である。
3. 本書で用いた土器型式名は原則的に「山梨県史 資料編2」を踏襲した。

目 次

例言・凡例

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	1
第1節 立地環境	1
第2節 周辺の遺跡	2
第Ⅲ章 調査の概要	3
第1節 調査の方法と経過	3
第2節 基本土層	4
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	7
第1節 概 要	7
第2節 敷石住居址	8
第3節 土坑・ピット	16
第4節 道路状遺構	18
第5節 遺構外出土遺物	20
第Ⅴ章 成果と課題	24
第1節 橫道遺跡における縄文時代の様相	24
第2節 まとめにかえて	25

挿図目次

第1図 遺跡位置及び主要遺跡分布図 [1/50,000]	2
第2図 周辺地形図(1)	3
第3図 周辺地形図(2) [1/5,000]	4
第4図 周辺図及び明治25年地籍図	4
第5図 グリッド配置・検出時遺構配置図 [1/80]	5
第6図 第1号・2号住居址遺物出土状況 [1/60]	6
第7図 第1号住居址 [1/30・1/60]	7
第8図 第1号住居址出土土器 [1/3]	8
第9図 第2号住居址 [1/60]	10
第10図 第2号住居址出土土器(1) [1/3]	11
第11図 第2号住居址出土土器(2) [1/3]	12
第12図 第2号住居址出土土器(3) [1/3]	13
第13図 第2号住居址出土土器(4) [1/3]	14
第14図 第2号住居址出土土器 [1/1・1/3]	15
第15図 土坑 [1/50・1/100]	16
第16図 土坑出土土器 [1/3]	18
第17図 土坑・ピット出土土器 [1/1・1/3]	19
第18図 遺構外出土土器(1) [1/3]	21
第19図 遺構外出土土器(2) [1/3]	22
第20図 遺構外出土遺物(平安～中世) [1/2・1/3]	22
第21図 遺構外出土遺物 [1/1・1/3]	23

表 目 次

第1表 第2号住居址出土石器観察表	14
第2表 土坑・ピット出土石器観察表	19
第3表 遺構外出土石器観察表	20

写真図版目次

図版 1 全景 北東より 南西より 北東部	
図版 2 第1号住居址 検出状況 埋甕出土状況 同正面より 同西より 同左側埋甕 同右側埋甕	
図版 3 第2号住居址 遺物出土状況 同部分 同部分 南より 北より	
図版 4 土坑 南西部土坑群セクション 北東部 土坑群 13号土坑及び道路状遺構 1号土坑 セクション 同 遺物出土状況 人骨出土状況 古錢出土状況	
図版 5 道路状遺構 北東より 同 南西より 作業風景 作業風景 人骨に伴う御供養	
図版 6 第1・2号住居址土器 第1号住居址出土 第2号住居址出土	
図版 7 第1・2号住居址・土坑・遺構外土器 第 2号敷石住居址出土 第2号住居址出土 土 坑出土 遺構外出土	
図版 8 石器、火打石・古銭他 第2号住居址出土 土坑出土 第2号住居址出土 土坑出土 遺 構外出土 土器類 火打石 古銭	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

近年における情報化社会の流れは激しく、個人間による情報伝達手段としての携帯電話の普及・発展は著しいものがある。櫛形町内においてもすでに数ヶ所に携帯電話用の鉄塔が設置されている。ジェイフォン東京株式会社（平成12年10月よりジェイフォン東日本株式会社へと社名変更）もその例外ではなく、櫛形町下市之瀬の甲府盆地を望む市之瀬台地縁辺部に、携帯電話用無線基地局設備の設置を計画した。平成12年初夏、教育委員会へ埋蔵文化財の取り扱いに対する問い合わせがあった。事業計画地が文化財保護法第57条の2第1項にいう「周知の埋蔵文化財包蔵地」の横道A～D遺跡に囲まれた位置にあたり、周辺から縄文土器片等が表採されるため、埋蔵文化財の存在が予測されたことから試掘調査の必要と文化財保護法に基づく発掘届の必要の旨回答した。

平成12年8月25日、ジェイフォン東京株式会社より発掘届が提出され、同年9月6日町教育委員会により試掘調査が実施された。

試掘調査では住居址と土坑ならびに縄文時代中期～後期の土器片多数が検出され、工事着工に先立って埋蔵文化財の事前調査が必要であると判断され、ジェイフォン東京株式会社に伝えた。

引き続き調査体制など発掘調査の具体的な調整に入り、調査範囲を確定し、同年11月2日協定書を締結、同11月6日より調査を開始した。

第Ⅱ章 遺跡の概観

第1節 立地環境

横道遺跡は山梨県中巨摩郡櫛形町下市之瀬字横道に所在し、標高は約325mを測り、甲府盆地を望む市之瀬台地縁辺部に立地する（第1・2・3図）。台地縁辺部周辺は扇状地にかけて傾斜を利用して、石積みを用いた棚畠が広がっている。

周辺の地形を概観すると、日本を東西に二分する大構造、フォッサマグナの西縁を限る糸魚川・静岡構造線が南北に走り甲府盆地の西端を画している。断層は甲府盆地の西端では幾重にも発達しており、大きな地形の変換点を成し、櫛形町周辺では「南アルプス」と櫛形山を主峰とする「巨摩山地」を隔て、その東麓では伊奈ヶ湖断層崖をもって「市之瀬台地」、さらに下市之瀬断層崖によって甲府盆地西端の「複合扇状地」へと至り、大きく3地形を形成している。

巨摩山地は3,000m級の高峰が連なる南アルプスの前衛で、その主峰である標高2050mを測る櫛形山には8万年前からの生息が確認されている東洋一の規模を誇るアヤメの群落や、カラマツなどの原生林が広がっている。巨摩山地の東側は急斜面をもつて標高を減じ低い丘陵性の山地及び台地へと低下する。櫛形山の東麓に広がる市之瀬台地は、伊奈ヶ湖断層崖前面に発達した洪積扇状地が甲府盆地形成に伴った最も新しい地殻変動によって形成された丘陵状の地形である。台地は南北4km、東西2.5kmの扇形平面形を呈し、標高は400～500mを測る。

この市之瀬台地上面は、櫛形山を水源とする北から高室川・塙沢川・深沢川・漆川・市之瀬川等が流れ、侵食地形を呈している。これらの河川が形成した谷に挟まれ、東側へと舌状に張り出した小支川が北から曲輪田・伝嗣院、六科丘、上野山、御殿山などと並び扇状地を望んでいる。台地前面は比高差100～120mを有する下市之瀬断層崖を経て盆地床の扇状地へと至る。台地を流れる河川は上流では18～22という急勾配をもって流れ落ち、盆地床に至ると急速に流勢を弱め、自ら削りだした大量の土砂を堆積させる。こうして各谷から流れ出た土砂は、御動使川の形成する大扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」を成している。

横道遺跡は市之瀬川と漆川とに挟まれた舌状台地の南縁辺部、市之瀬川を見下ろす位置にある。漆川や市之瀬川よって開析された扇状地は標高約310～300mを肩頂とし、その肩央部に鉛物師屋遺跡などが立地する。遺跡の

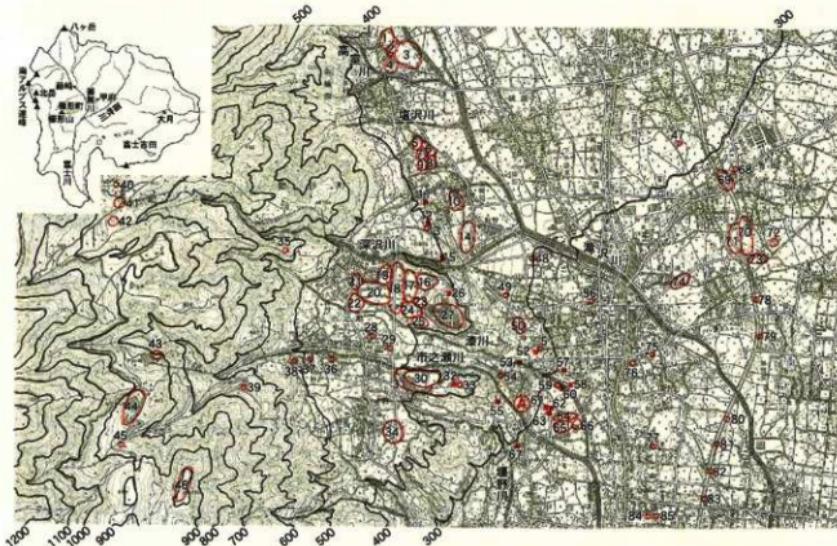
西には市之瀬川の刻んだ小支谷を挟んで物見塚古墳の上の山を見上げている。

第2節 周辺の遺跡（第1図）

横道遺跡の所在する櫛形町周辺では現在数多くの遺跡の存在が予測され、近年調査例も着々と増し、周辺地域の成り立ちを解明する成果が着実に得られている。

町内の遺跡を簡単に眺めると、市之瀬台地に遺跡は集中して確認されている。近年では横道遺跡の漆川を挟んで北に位置する六科丘～平岡の台地周辺での調査が集中して行われ台地全体の古代の姿が見えつつある。全体的には縄文時代中期後半曾利式の資料が増加している。また、扇状地においても数々の成果を挙げ、曲輪田では高室川と大和川に挟まれた位置に縄文時代中期の拠点的集落である北原C遺跡が、また台地から離れた甲西バイパス建設予定地には弥生時代末～古墳出現期の集落や方形周溝墓群の村前東遺跡、十五所遺跡が存在する。しかし、扇状地の遺跡として特筆すべき遺跡は、横道遺跡から望まれる、漆川から供給される扇状地の扇尖部に立地する「木遺跡」、鉄物師屋遺跡である。国重要文化財に指定された縄文時代中期の出土品で著名であり、中期中葉新道式～藤内式期の集落址である。

同じ台地上には下市之瀬大畑A遺跡がある。平成元年の調査では、縄文時代の遺跡が想定されていたが、早期の遺物が少量検出されたのみで、弥生時代中期須文系～古墳出現期の遺物が主体であった。



1. 北原A	2. 北原B	3. 北原C	4. 北原D	5. 北原A	6. 北原B	7. 北原C	8. 神明A
9. 北新田C	10. 鶴坪	11. 無名墳	12. 斎崎古墳	13. 路崎神社横	14. 曾坂	15. 無名墳	16. 東原B
17. 長田A	18. 長田口	19. 東原A	20. 中郷	21. 利手作	22. 久保田A	23. 長田B	24. 新宿田A
25. 新宿田B	26. 六科丘古墳	27. 六科丘	28. 古原田	29. 清水A	30. 椿城	31. 上の山	32. 上ノ東古墳
33. 上ノ東	34. 古麗敷	35. 佐登	36. 下杉木A	37. 上杉木B	38. 上杉木A	39. 櫛形山中A	40. 高尾北面
41. 高尾丸山	42. 高尾大清水	43. 伊勢ヶ郷	44. 南伊勢ヶ郷	45. 櫛形山中B	46. 中野城	47. 赤面C	48. 植平A
49. 審神院横	50. 収下	51. 宝寺西	52. コウモリ塚古墳	53. 日除古墳	54. 下西之浦古墳A	55. 物見塚古墳	56. (伝)小原氏庭
57. 無名塚	58. 蓬土塚古墳	59. 風致A	60. 風致古墳	61. 鉄物師尾古墳	62. 無名塚	63. 無名塚	64. 川上道下
65. 鉄物師尾	66. ノ木	67. 横原上村古墳	68. 童小学校	69. 十五所	70. 村前東A	71. 村前東B	72. 菊原G
73. 角力場第二	74. 乾把B	75. 東山口	76. 下当地	77. 村内	78. 新道道下	79. 二木郷	80. 向河原
81. 油田	82. 中田畠	83. 大御東丹保	84. 住吉	85. 西町	(Ⓐ) 横道		

第1図 遺跡位置及び主要遺跡分布図 [1/50,000]

第III章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

平成12年11月6日、現地での発掘調査を開始した。

本遺跡は甲府盆地を望む市之瀬台地東縁部にあり、北西から南東への比較的急な斜面に立地している。周辺は現在では主に果樹園として利用され、石積みにより細かく構造が造られている。重機を用いて耕作土を除去すると旧地形は緩やかな傾斜が確認され、耕作土は傾斜する南東ほど厚く西側で約50cm、南東側で約70~80cmを測る。

耕作土を除去すると、試掘調査での成果通り表土掘削開始直後より縄文時代中期~後期の土器片が多数検出され、調査区北部の浅い位置で縄文時代敷石住居の縁石が検出された(第2号住居址)。同じレベルで耕作土の除去を行うと北側を中心に砂礫層が現れ、南側では一部を除き砾が集中して検出された。集石遺構の可能性を考慮し、調査区の軸に合わせた任意のグリッドを設定し(第5図)、ベルトを残しながら砾を除去し、遺構確認および掘削を行った。それらの一部調査区東南壁沿いの砾群については地籍図などと照らし合わせると近代の道路と一致することがわかった(第4図)。また、北東部からは当初検出された敷石住居よりも深い位置で敷石(配石)が確認され(第1号住居址)、当初同一柄鏡型住居址の主体部と張り出し部かとも思われたが、完掘に近づくと軸がそれぞれ異なることが判明し、別の遺構であった。よって本遺跡が縄文時代中期~後期と、江戸時代以降の時期から成るものとわかった。

確認面の砾の間から人骨と六文銭が出土し、また、調査の進行とともに土坑から骨の出土も多くなってきたことから、事業主により現地にて地元僧侶による御供養が行われることとなった。

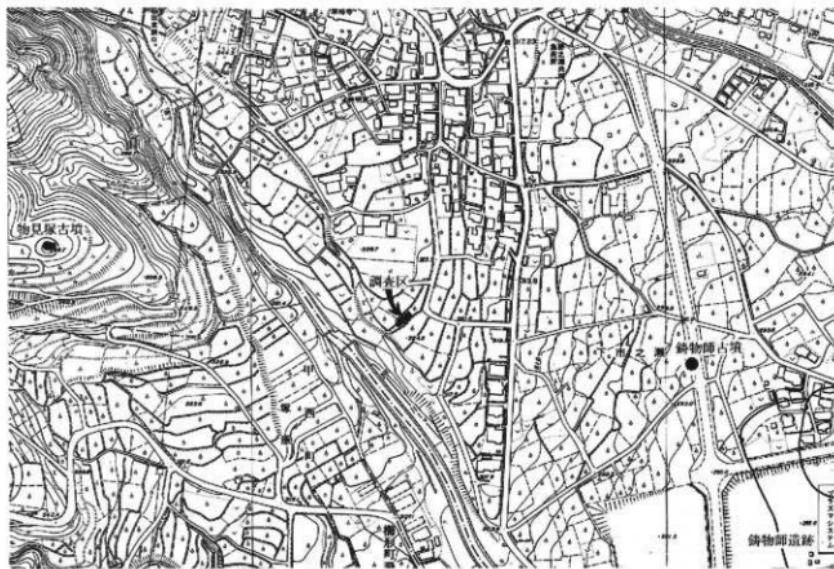
11月28日、現地での調査を終了した。



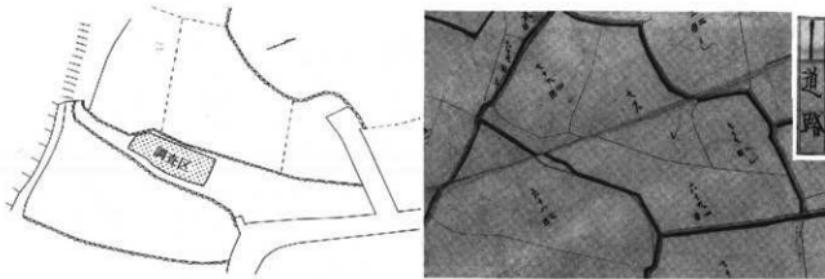
第2図 周辺地形図(1)

■ … 市之瀬台地

■ … 扇状地



第3図 周辺地形図(2) [1/5,000]



第4図 周辺図及び明治25年地籍図

第2節 基本土層

前節の通り西側で約50cm、南側で約70~80cmを測る耕作土の下層に遺構確認面である砂礫層が検出される。砂礫層は黄褐色で一部緑灰色を呈する箇所も確認される。

基本土層は以下の通り。今回検出された遺構は大きく縄文時代と近世とに二分されるが、覆土の様相も全く異なる。縄文時代の住居は耕作土を除去した時点で敷石や縁石が露出した。どちらも遺構の性格上礫を含むが、縄文時代の覆土は近世のそれにくらべて土色が明るくしまりが強い。

- 第I層 暗褐色土層 磚々3~5cm小量に含む（第II~IV層に比べ少ない）（耕作土）
- 第II層 暗褐色土層 粘性あり、しまりあり、礫多量に含む
- 第III層 褐色土層（明るい>第II層） 粘性やや強、しまりやや強礫多量含む（縄文時代覆土）
- 第IV層 黄褐色砂礫層 しまり極強（一部緑灰色を呈する）（遺構確認面は第IV層上面）

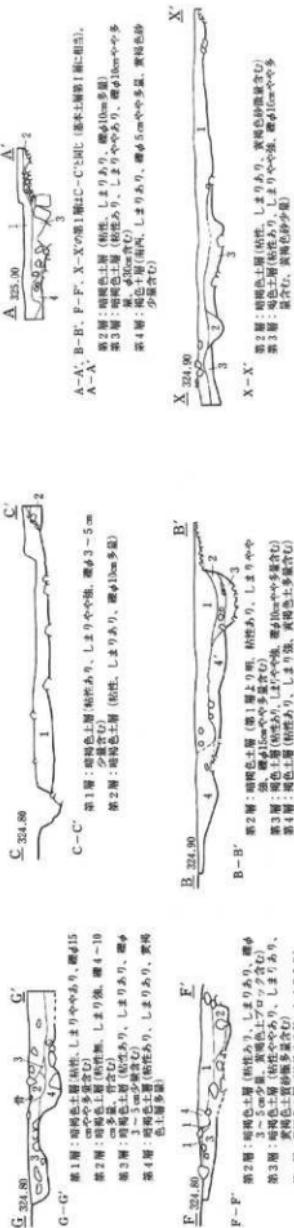
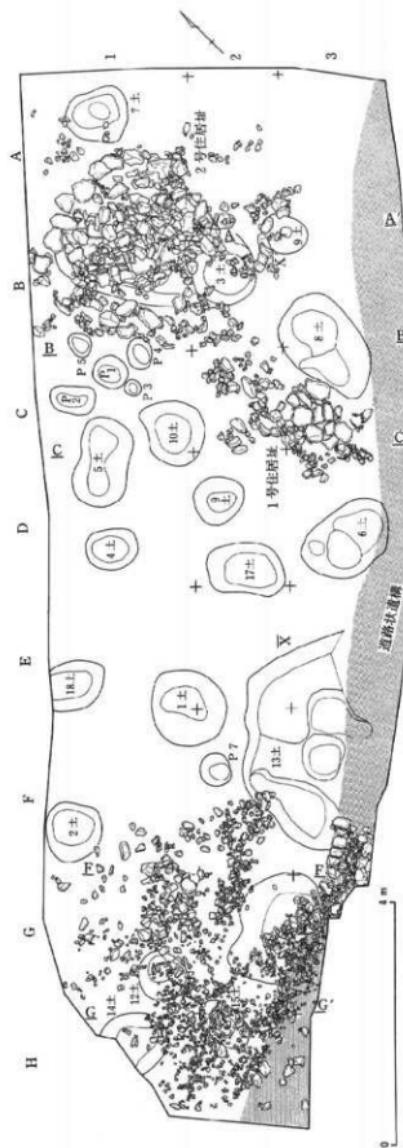
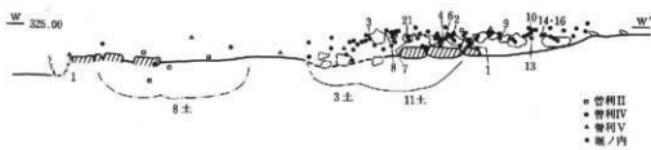
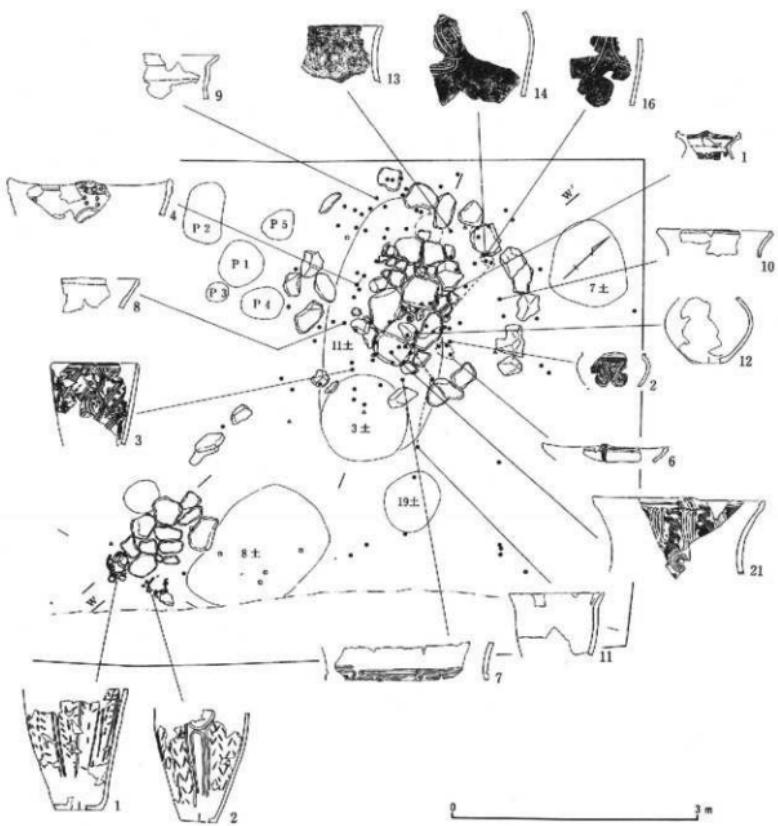
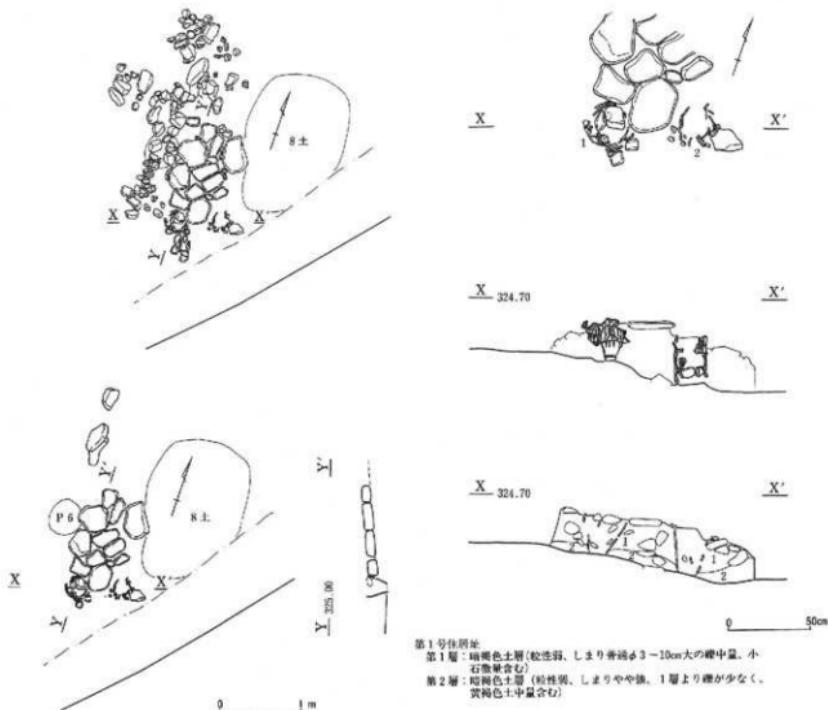


図 5 地質断面図 [1/80]



第6図 第1号・2号住居址遺物出土状況 [1/60]



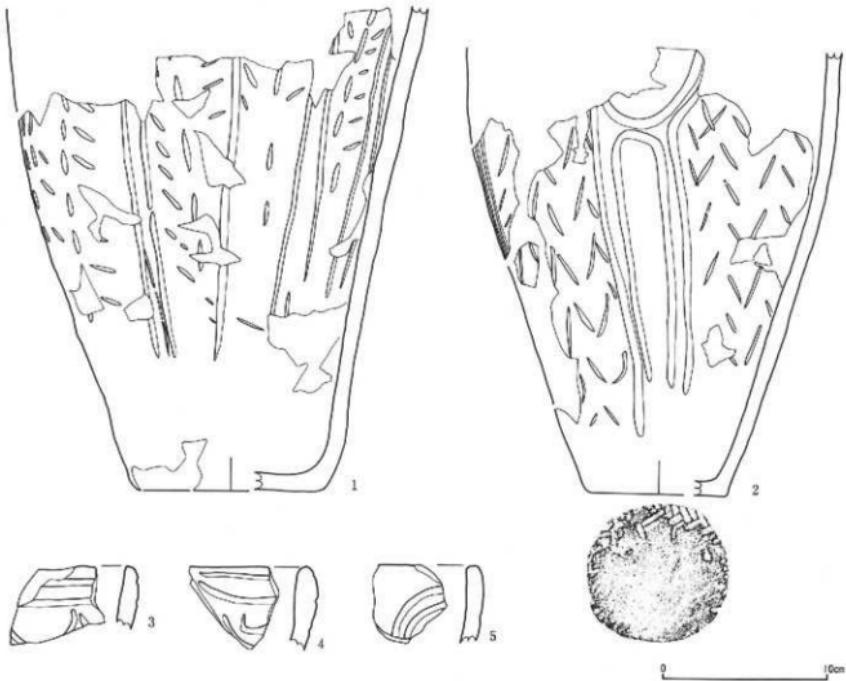
第7図 第1号住居址 [1/30・1/60]

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 概要 (第5・6図)

本調査において検出された遺構は、縄文時代敷石住居址、同土坑、ピット、近世土壙墓、近代道路状遺構などが挙げられる。主な遺構の分布傾向として、縄文時代敷石住居址は調査区北東部に2軒、近世土壙墓は調査区全体、近代道路は南側調査区壁にほぼ沿ってそれぞれ検出された。当初表土除去後現われた礫群に関しては前章で記した通り道路状遺構以外は明確に遺構に伴うものと判断されるものは無かった。敷石住居はそれぞれ軸の違いや距離、また出土遺物の傾向から別住居であることが判明した。

遺物は調査区全体から出土したが住居址が検出された調査区北東部に集中している。殆どが縄文時代土器片であるが、大まかに縄文時代前期初頭から後期初頭までの各時期が確認できる。ドットで遺物あげした資料のみでも938点を数え、細片を合わせると出土量は天籍にして約20箱を数える。石器については観察表も併せて参照されたい。縄文時代以外の遺物は極端に少なく、土師器片1点以外は土坑墓を示す遺物が若干みとめられるのみである。人骨や骨粉は北側を中心に検出されている。



第8図 第1号住居址出土土器 [1/3]

第2節 敷石住居址

第1号住居址 (第7・8図、図版2・6)

遺構

調査区北東部、第2号住居址の南約2mに位置する。東側で8号土坑と重複し、南側で道路状遺構と重複し調査区外となる。後述する検出状況からはむしろ埋甕を伴う配石遺構として扱うべきかとも考慮されるが、今回は敷石住居として扱う。平面形は不明であるが、残存する敷石（配石）の規模は長軸1.4m、短軸0.9mを測り、主軸はほぼ南北を指す。施設としては炉、柱穴は検出されなかった。P6は本住居址に伴うかは不明。確認できた敷石の南限で埋甕が2基検出され、敷石に伴うものとみられる。敷石が住居部を示すのでは無く柄鏡形敷石住居の張出部である可能性もあり、住居址のプランが南北どちらへ展開するか不明である。また周間に扁平な礫もみられることから、敷石の一部を第2号住居址や、近世土壤墓、近代道路状遺構に再利用した可能性も挙げられる。

遺物

出土遺物は非常に少量である。計5点を図示した。1・2は埋甕で、3・4は1と同一、5は2と同一である。1は地文に「ハ」の字文が充填され縦位に平行沈線が垂下する深鉢形土器。2は「ハ」の字文の地文に平行沈線による日字状の区画をもつ深鉢形土器の胴部下半から底部である。底部は網代压痕がみとめられるが、編み方は不明である。3・4・5はいずれも口縁部破片である。

時期は、埋甕から縄文時代中期末曾利V式期の所産と考えられる。

第2号住居址（第9～14図、図版3・6・7・8）

遺構

調査区北側、第1号住居址の北約2mに位置する。南側で3号土坑と重複し、19号土坑とも近接する。また下部において11号土坑と重複する。平面形は隅丸三角形に近い不整円形の敷石住居で、後述するとおり柄鏡形を呈するかは不明である。推定規模は主軸・副軸共に3.5mを測る。主軸方向はW-30°-Nを示す。住居址周辺には礫が多く散在しており、流れ込みや台地縁辺部の最下部という点からも土石流などの影響も考慮される。

敷石は全面には検出されず、炉周辺の敷石と縁石のみが確認される。敷石および縁石には扁平な礫が使用されている。周縁部は縁石が比較的良好に遺存しているが、一部の礫が示すように本来立位であったと考えられ、ほぼすべての礫が内側へ倒れた様子がみられる。主軸上に3号土坑が重複するため柄鏡形を呈するかは不明であるが、縁石の状況から入り口部がこの位置にあったと考えられ、張出部を持っていたとも推測される。縁石内部径は副軸で約3.1mを測る。

床面は南側に若干傾斜するもののほぼ平坦であり、北側の壁付近でやや浅くるやかに立ち上がっている。覆土は薄いものの、主に礫を多量に含む暗褐色土層が主体である。居住部奥壁付近で一部に焼土や炭化物が集中して確認された。

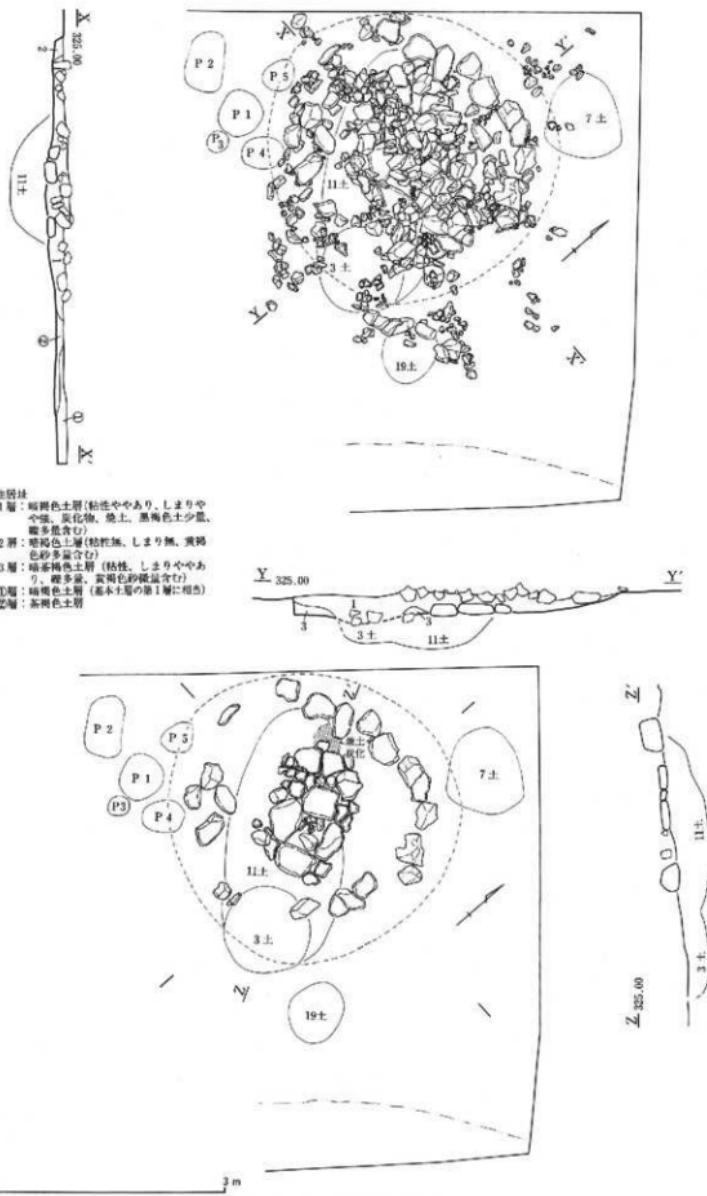
炉はいわゆる石囲い炉で、上面が平坦な約0.5m大の平石4枚で囲われており、周間に主軸方向に伸びて敷石が配されている。炉の内部に焼土や炭化物は顕著には確認されなかった。居住部内にピットは検出されなかった。外周南西部にピットは検出されているが周囲を巡ることはなく、本住居址に伴うものは不明である。埋甌も検出されなかった。

遺物

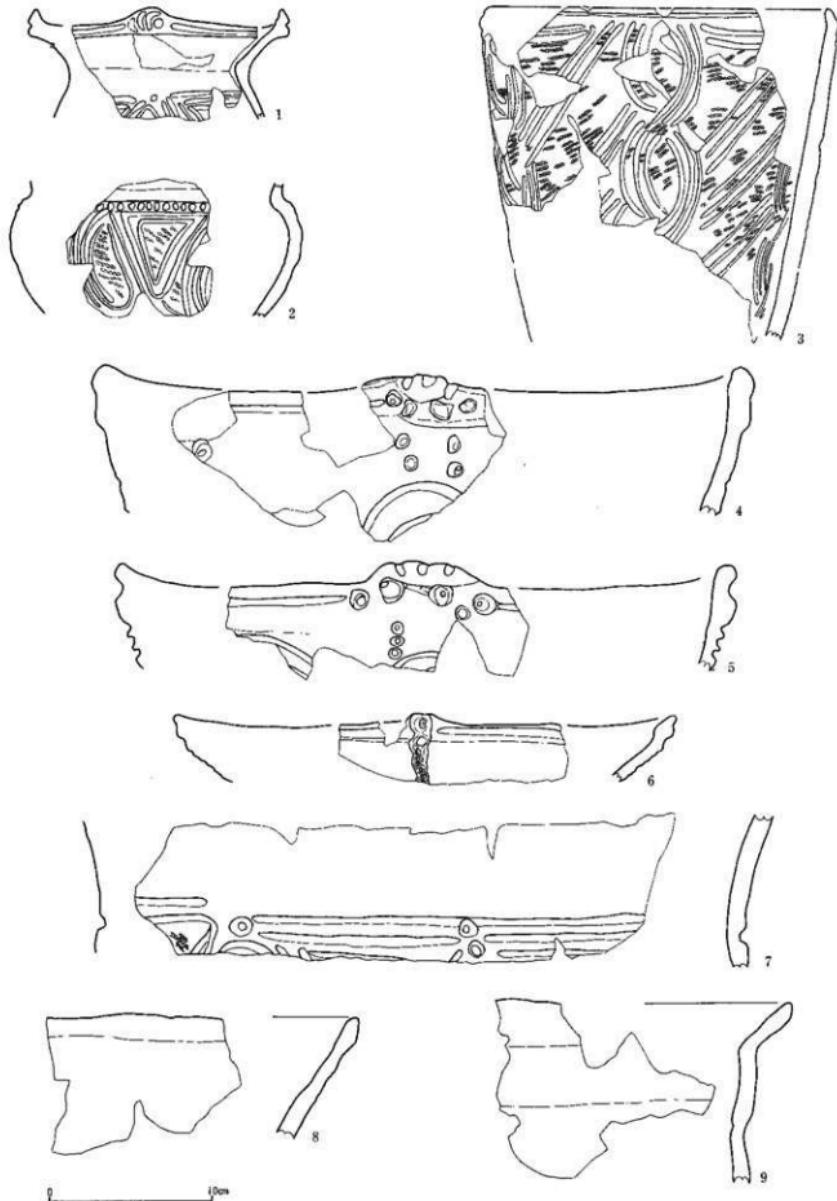
本住居址からは、流れ込みと思われる礫が大量に検出している。それらのうち土器片66点、石器13点を図示している。遺構確認時からすでに後期堀之内1式土器片が多く見られ、住居址内の出土資料でも、遺存状態の良いものは殆ど該期に位置付けられる（第10～13図1～53）。1、2は体部上半が無文帶の鉢で2条ないし3条の沈線で三角形のモチーフが描かれている。両者は6とともに色調は黒褐色で胎土は密である。3はやや内湾しながらも口縁へ向けてほぼ直線的に立ち上がる。地文はR L綱文。4～6は口縁部破片で綴やかな波状を呈し、口唇部直下を沈線が横走する。6は、波頂部から竹管状工具による連続刺突文が施された降帯が垂下する。胎土は密。13は粗製土器で、器面を指頭のような形で整形している。21～24は口縁部破片で地文はR L綱文が施されている。21は口唇部直下に沈線が横走し波頂部には刺突文と平行沈線によるR L綱文の地文に3条ないし4条一單位で沈線が垂下する。45、51は注口土器の注口部および把手破片であり、1式に位置付けられる。また中期後半曾利式（第13図54～65）の土器片も確認され、第1号住居址に関わる資料の流れ込みを想定させる。55は平行隆帯のモチーフがつき、地文は列点文。曾利II式に比定される。56は太く深い沈線が横走する。曾利IV式か。他は地文に列点文、「ハ」の字文が充填され、54、61、64は平行沈線が垂下する。曾利V式に比定される。66は口縁部破片、称名寺式。

石器の出土量は多くない。全13点のうち墨曜石製の無茎石錐は5点（第14図1～5、5は未製品）、打製石斧1点（同7）、凹石3点（同8～10）、石皿の破片3点（同11～13）である。1・4は側縁に緩い段をもつ。3は抉りが深い。9は磨石としても使用されている。

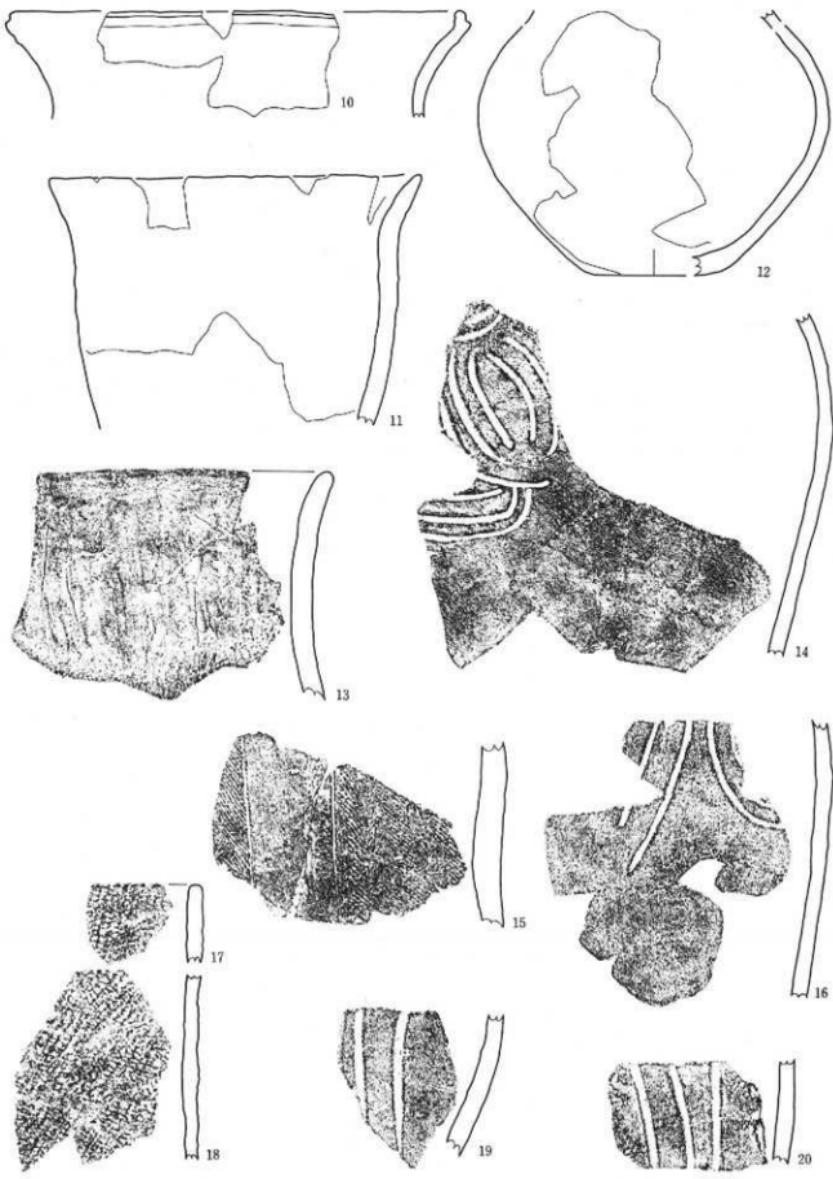
時期は、出土遺物より縄文時代後期前葉期之内1式期の所産と考えられる。



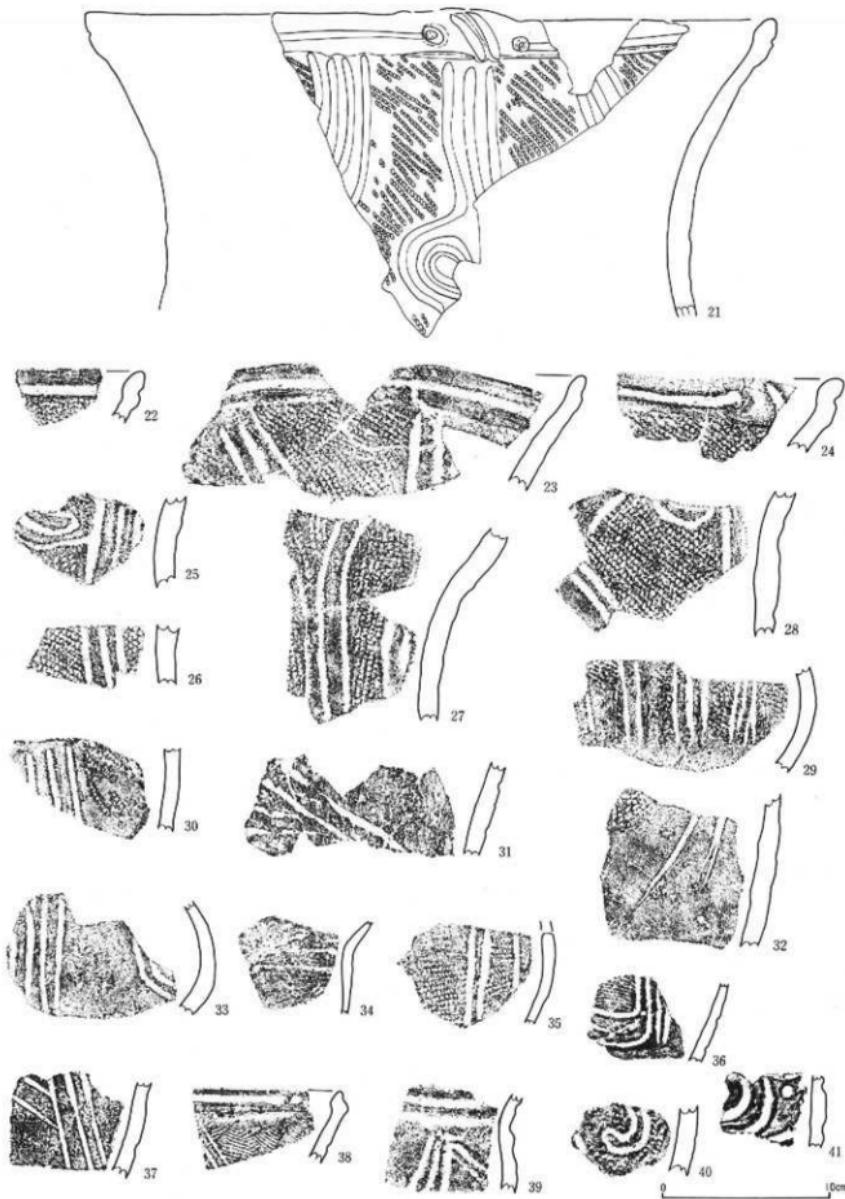
第9図 第2号住居址 [1/60]



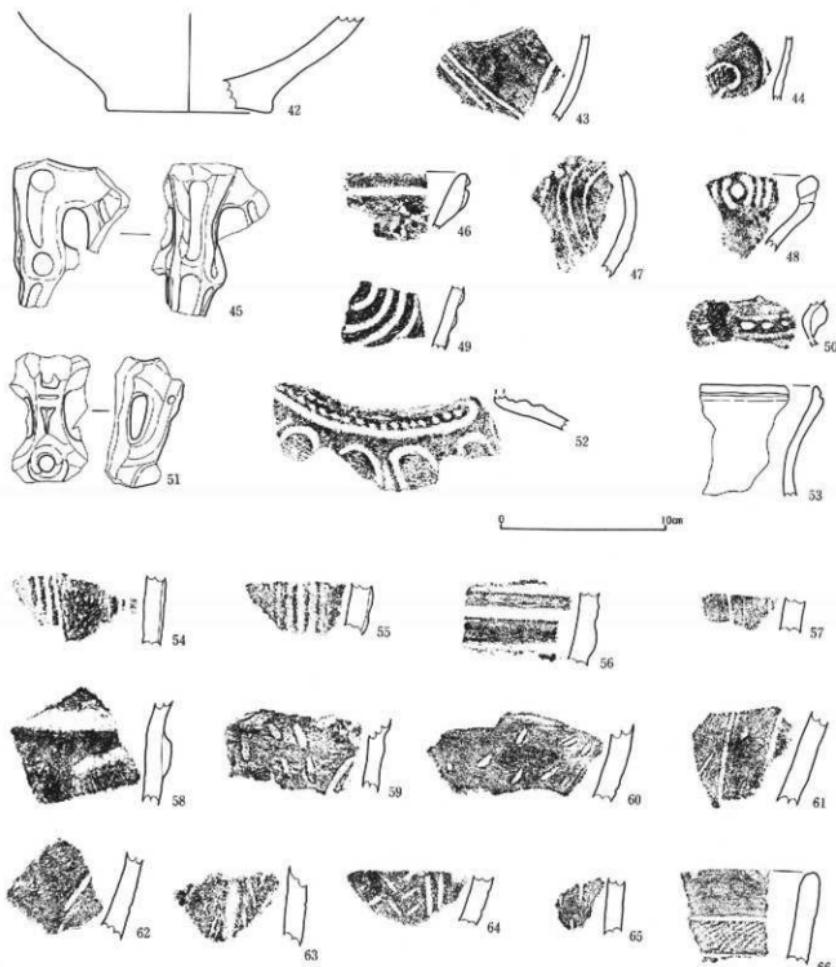
第10図 第2号住居址出土土器(1) [1/3]



第11圖 第2號住居址出土土器(2) [1/3]



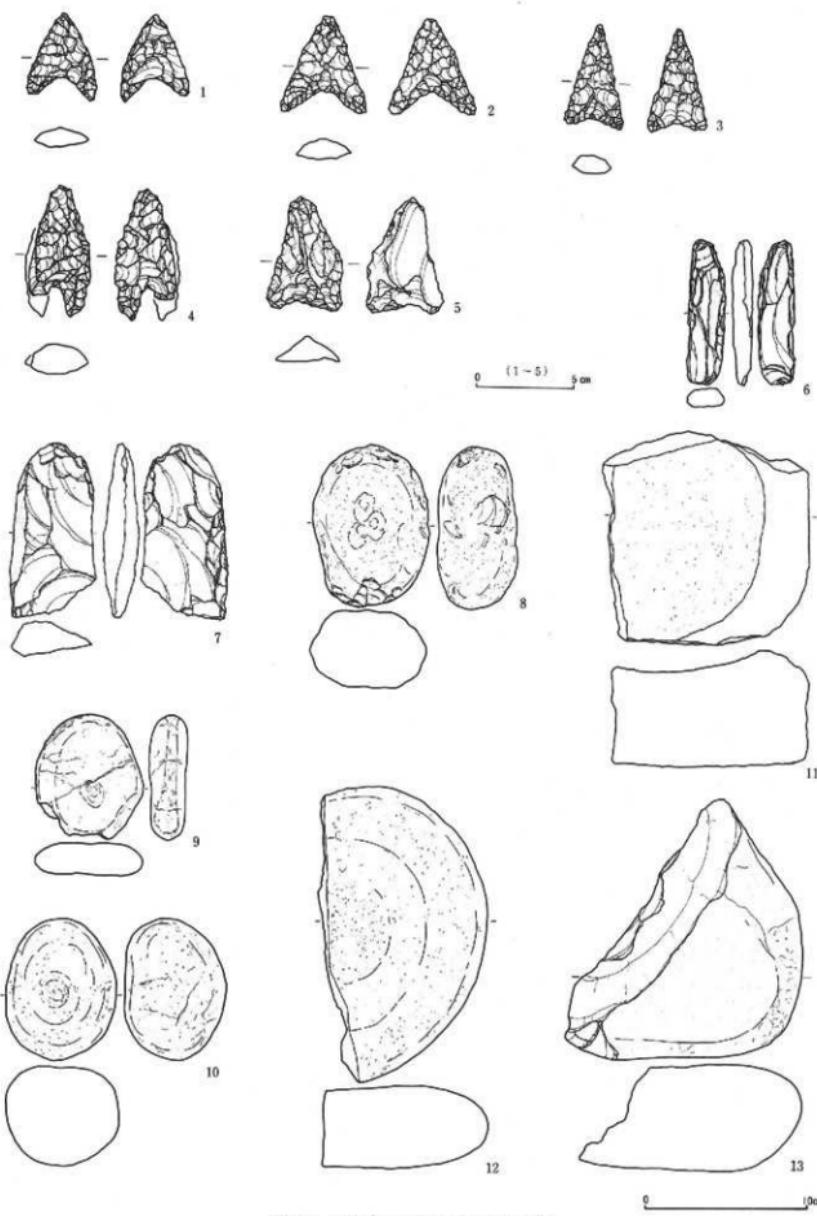
第12図 第2号住居址出土土器(3) [1/3]



第13圖 第2號住居址出土土器(4) [1/3]

No.	出土位置	器種	重量(g)	石 材	No.	出土位置	器種	重量(g)	石 材
1	2號住居	石鎚	0.5	黑曜石	8	2號住居	凹石	446.6	玄武岩
2	2號住居	石鎚	0.8	黑曜石	9	2號住居	凹石	140.6	砾岩
3	2號住居	石鎚	0.6	黑曜石	10	2號住居	凹石	441.8	砾岩
4	2號住居	石鎚	1.6	黑曜石	11	2號住居	石皿	1950.0	砾岩
5	2號住居	石鎚	1.2	黑曜石	12	2號住居	石皿	1280.0	安山岩
6	2號住居	打製石斧	34.8	粘板岩	13	2號住居	石皿	1760.0	砾岩
7	2號住居	打製石斧	121.5	珪質頁岩					

第1表 第2號住居址出土土石器觀察表

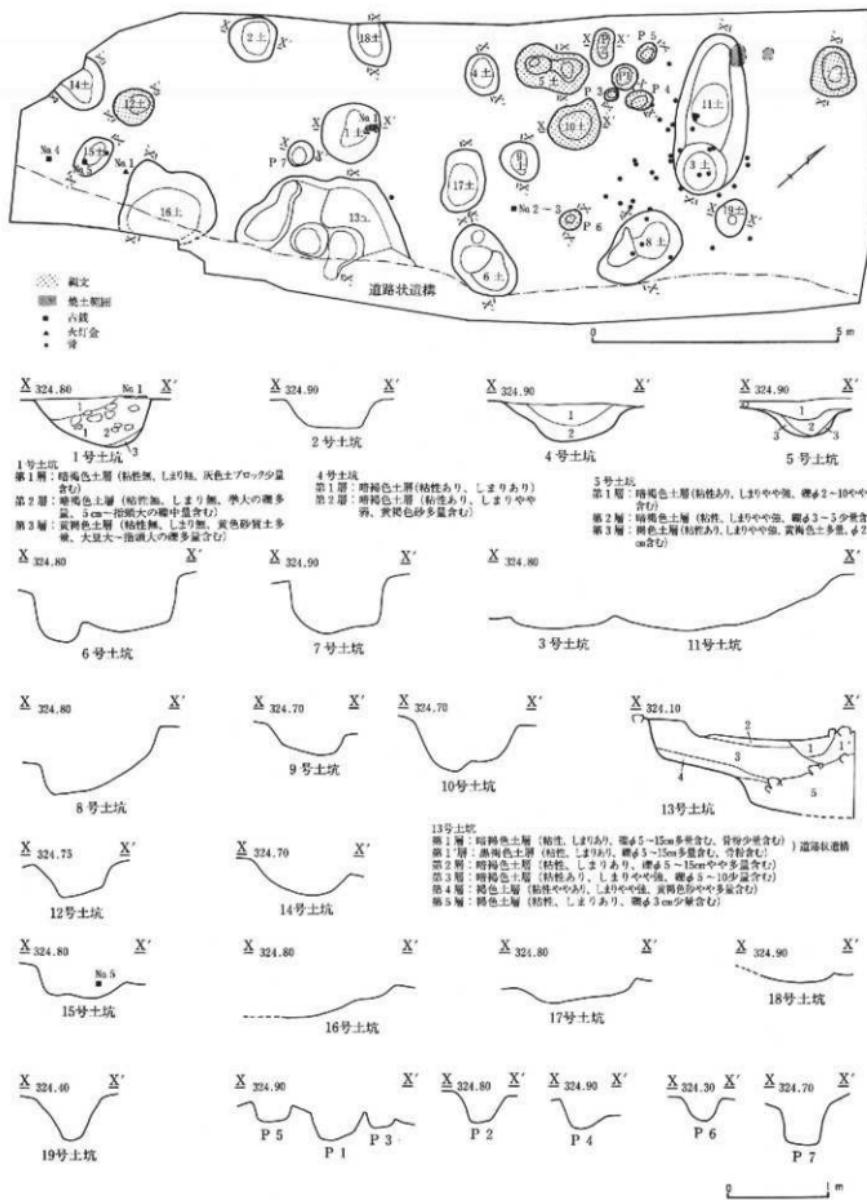


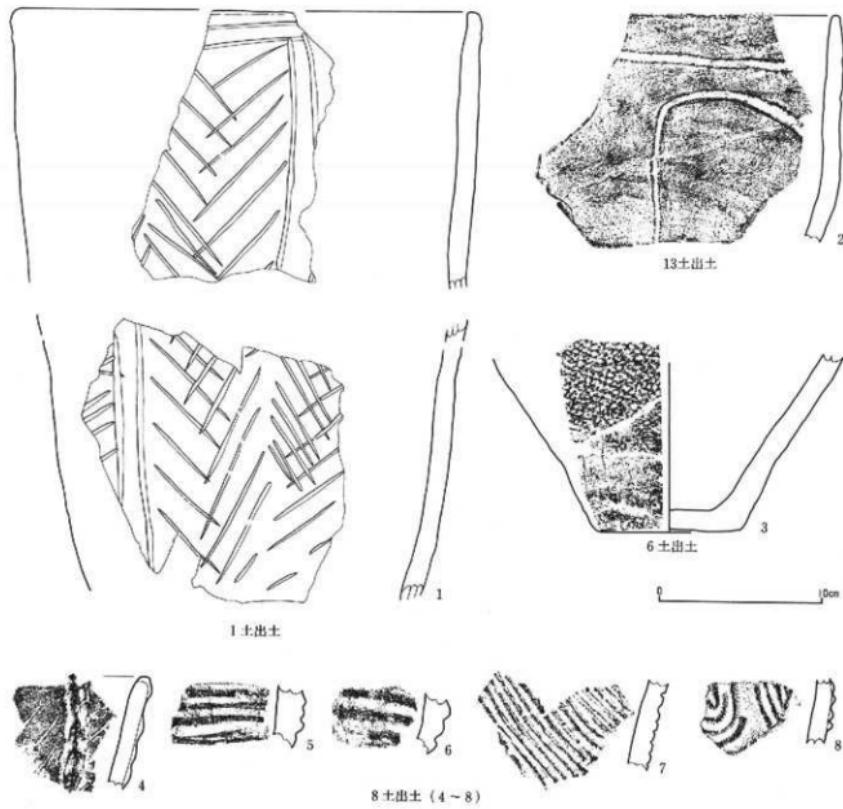
第14図 第2号住居址出土石器 [1/1・1/3]

第3節 土坑・ピット（遺構第15図、土器第16図、石器第17図、図版4・7）

本調査では土坑は19基、ピットは7基検出された。前述した通り、ピットは住居址に伴うか不明なため全て本節にて扱うこととする。土坑の大部分は近世土壙墓と考えられる。第III章第2節で述べた通り覆土からも判断可能であるが、人骨や骨粉の有無も大きな判断材料としている。なお、現地での観察から縄文時代に属すると思われる遺構は第5図上にアミ掛けして示した。

- 1号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とし、3層に分けられる。遺物は、土坑上面に縄文時代中期末曾利V式の深鉢土器の破片が検出された（1）。破片は口縁部から胴部にかけてで、口縁部に沈線が横走し、平行沈線が垂下して区画された縦杉文が充填される。土坑の時期を示すものではない。
- 2号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とする。遺物は出土していない。
- 3号土坑：第2号住居址、11号土坑と重複する。覆土は暗茶褐色土層を基調とし、骨粉を多く含む。
- 4号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とし、2層に分けられた。遺物は出土していない。
- 5号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とし3層に分けられる。
- 6号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とする。遺物は縄文土器1点（3）と石器2点。土器片は地文にRL縄文を持つ胴部下半から底部の破片。石器は横型石匙（1）1点と凹石（3）1点。
- 7号土坑：覆土は暗茶褐色土層でしまりがやや強い。縄文土器が出土しているが図示不可能。
- 8号土坑：第1号住居址に重複している。覆土は暗褐色土層で、骨粉を含む。土坑の肩に30cm規模の礫が検出された。遺物は5点。5～8は縄文時代中期後半曾利II式。特筆すべきは4の口縁部破片で、口縁部から垂下隆帯を下げ斜行沈線をつける。縄文時代前期前半中越式とみられる。
- 9号土坑：不整円形の平面形をもち、覆土は暗褐色土層。
- 10号土坑：覆土は褐色砂質土層。遺物は土坑上面から黒曜石の石核（4）1点が出土している。
- 11号土坑：第2号住居址の敷石下に重複する。覆土は褐色土層を基調とし、縄文土器が出土したが、細片であり、詳細は不明である。
- 12号土坑：暗茶褐色土層を基調とし、砂質分を少量含む
- 13号土坑：複数の土坑が重複していると思われる。遺物は2点。土器片（2）は口縁部から胴部破片で、無文に沈線が巡っている。縄文時代後期前葉塙之内式。石器（2）は横型石匙。
- 14号土坑：覆土は褐色土を基調とする。
- 15号土坑：覆土は暗褐色土層で粘性は無いがしまりは強い。遺物は上面から古錢が出土している。詳細は第5節を参照のこと。
- 16号土坑：覆土は暗褐色土層を基調とする。
- 17号土坑：覆土は暗褐色土層で褐色土、φ10cm程の礫を多量に含む。
- 18号土坑：覆土は暗褐色土層。非常に浅いが、調査区外へ続く西側壁は東側より立ち上がるるものと推測される。
- 19号土坑：覆土は暗褐色土層。
- ピットは、7号ピットを除き覆土は褐色土層を基調とする。褐色土層を覆土にするピットは第2号住居址の西側に集中して検出されている。4号ピットは上面から黒曜石の石核（5）1点が出土している。7号ピットは暗褐色土層を基調とする。





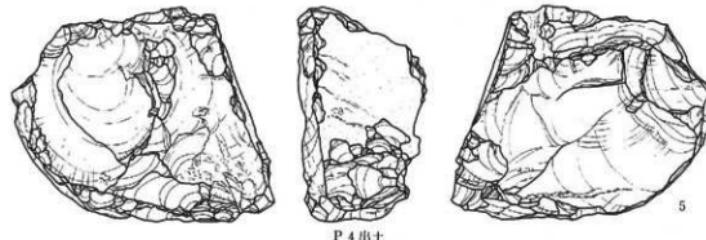
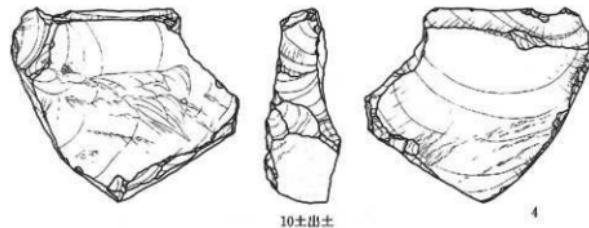
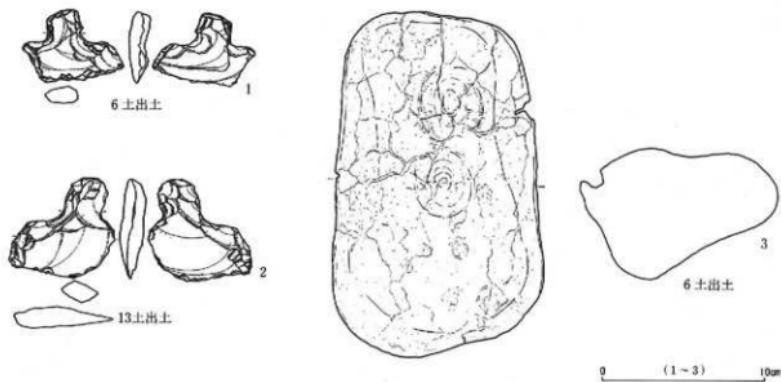
第16図 土坑出土土器 [1/3]

第4節 道路状遺構（第4・5図、図版5）

調査区東南壁沿いに石積みが確認され、その長さは調査区内で約17mを測る。

当初グリッドF～H-3で確認されたが、覆土の厚いA～E-3でも検出され一続きであることが判明した。道路状遺構は調査区側のみならず、調査区外の反対側にも同様な石積みが確認されるものと考えられる。石積みは調査区東南壁に沿って検出されているが、グリッドG-3付近で調査区内側へと伸びる。この様子は明治25年調製の地縞図に描かれている道路と一致し（第4図参照）、再度調査区壁の延長上へと方向を戻し、更に南西方向へ伸びるものと思われる。グリッド断面G-G'（第5図）や13号土坑断面（第15図）の観察などから、本調査区の遺構では最も新しい遺構であることがわかる。

なお、道路が敷かれていた当時、当調査区周辺の土地は水田として利用されていたことが地縞図からよみとることができる。



第17図 土坑・ピット出土石器 [1/1・1/3]

No	出土位置	器種	重量(g)	石 材	No	出土位置	器種	重量(g)	石 材
1	6号土坑	石匙	21.2	珪質頁岩	4	10号土坑	石核	26.8	黒曜石
2	13号土坑	石匙	40.0	珪質頁岩	5	4号ピット	石核	64.5	黒曜石
3	6号土坑	凹石	3180.0	礫岩					

第2表 土坑・ピット出土石器観察表

第5節 遺構外出土遺物

縄文時代

土器 (第18・19図、図版7・8)

本調査区の立地から考えると、遺物出土量は多いものの流れ込み等による影響が大きいことは想定がつく。遺構に伴わない遺物として、縄文時代の土器はある程度時代の広がりをもって確認された。

前期の土器片は8号土坑で前期前半の中越式とみられる土器片が出土しているが、その他にも縄文時代前期後半諸磁式期の土器片が少量ながらある程度のまとまりをみせてている(1~21)。1~5は諸磁式の口縁部破片。17・18は北白川式とみられ胎土は密である。その他は諸磁C式に比定される。6・8・13・16は口縁部破片で波状を成す。7~10・13・15・16には半裁竹管によって結節文を施された棒状貼付文が垂下し、ボタン状貼付文がみられる。地文は横方向の矢羽根状条線。

調査区全体でみてもやはり縄文時代中期後半~後期初頭の土器片がまとまりをみせている。ここでは38点を図示した(22~59)。22は縄文時代中期中葉内式。深鉢の胴部破片である。23~26は縄文時代中期中葉井戸尻式。本遺跡から見下ろす位置にある鶴物師屋遺跡・木遺跡ではこれらの時期を伴う集落跡が検出されている。27~43は縄文時代中期後半曾利式。無文口縁(27)や横位の平行沈線を重ねたもの(28)など曾利I式とみられる古い段階のものから、口唇部が若干肥厚し口縁部に広く浅い沈線が巡る曾利IV式の口縁部破片(41)や、ここでは図示しないが曾利V式とみられる細片も多く出土している。46・47は縄文時代中期末加曾利E4式。48~59は縄文時代後期前葉堀之内式。52・58は注口部破片。

石器 (第21図)

石器は全13点出土した。

1は黒曜石製の石鎌で、欠損している。2・3は打製石斧。2は片側縁刃部のみ加工し刃部を作っている。3は未製品。4・5は欠損した磨製石斧の基部。6~11は凹石。7は敲石としても利用されていたと考えられ、凹面とは別に底部に使用痕跡がみとめられる。9は第1号住居址の敷石に隣接した位置から出土している。12・13は石皿。

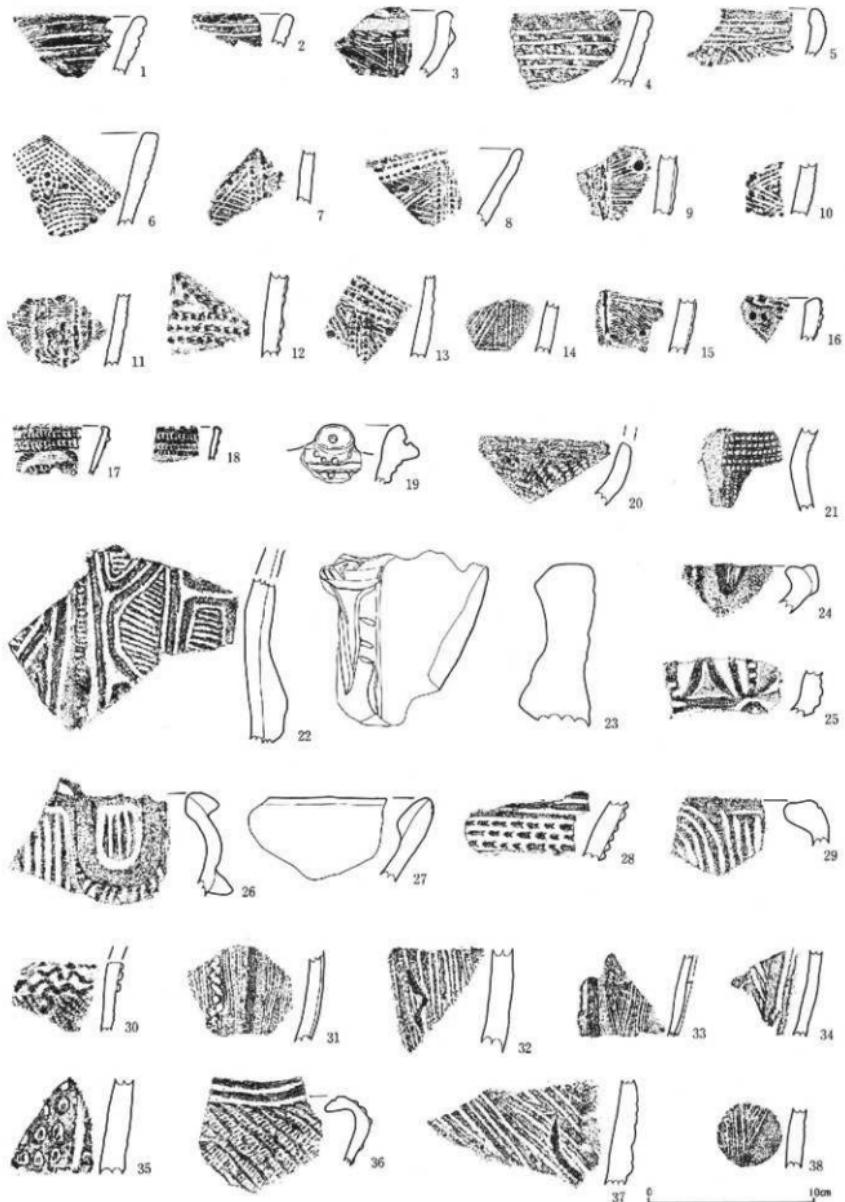
その他の時代 (第20図)

本調査区における縄文時代以外の遺物としては、1を除き、他は土壙墓に伴う遺物のみである。

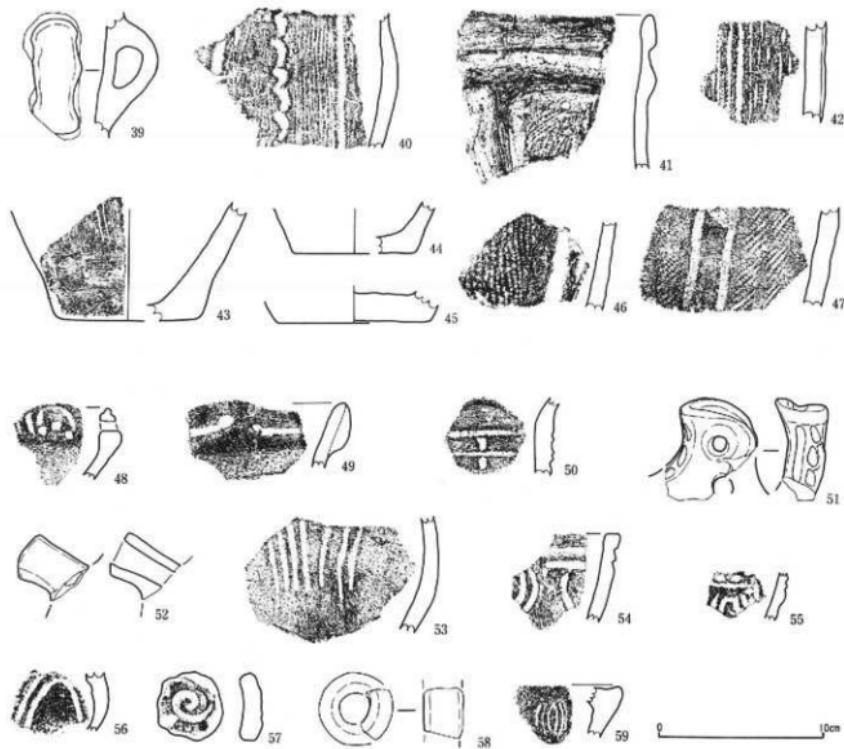
1は土師器。2は火打金。3~7は古銭。3は開元通宝、4は至和元宝、5は聖宋元宝、6は元祐通宝、7は寛永通宝。7は15号土坑上面から出土している。出土遺物から土坑は土壙墓であると判断される。時期について寛永通宝や火打金が闇葬されていることから近世と考えられるが、検出された骨の依存状態は悪く、ほとんどが骨片、骨粉として検出された。人骨、骨粉は図示し得なかったが、骨粉の分布は調査区北側(グリッドA~C-2~3)で多く検出された。古銭は1~2は調査区南西部(H-2)で、3~5は調査区中央(グリッドD-2)で検出された。

No	出土位置	器種	重量(g)	石 材	No	出土位置	器種	重量(g)	石 材
1	一括	石鎌	0.8	黒曜石	8	一括	凹石	482.2	礫岩
2	一括	打製石斧	18.0	珪質岩	9	一括	凹石	887.2	礫岩
3	一括	打製石斧	68.4	頁岩	10	C-3	凹石	613.6	礫岩
4	一括	磨製石斧	36.7	砂岩	11	一括	凹石	378.1	多孔質玄武岩
5	一括	磨製石斧	68.0	砂岩	12	一括	石皿	1630.0	粗粒輝石安山岩
6	一括	凹石	88.4	砂岩	13	一括	石皿	1790.0	礫岩
7	一括	凹石	199.2	礫岩					

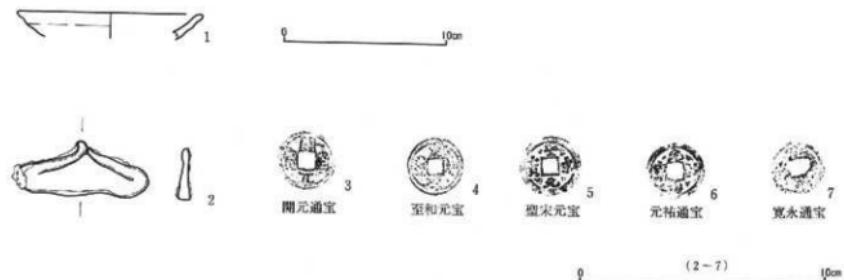
第3表 遺構外出土石器観察表



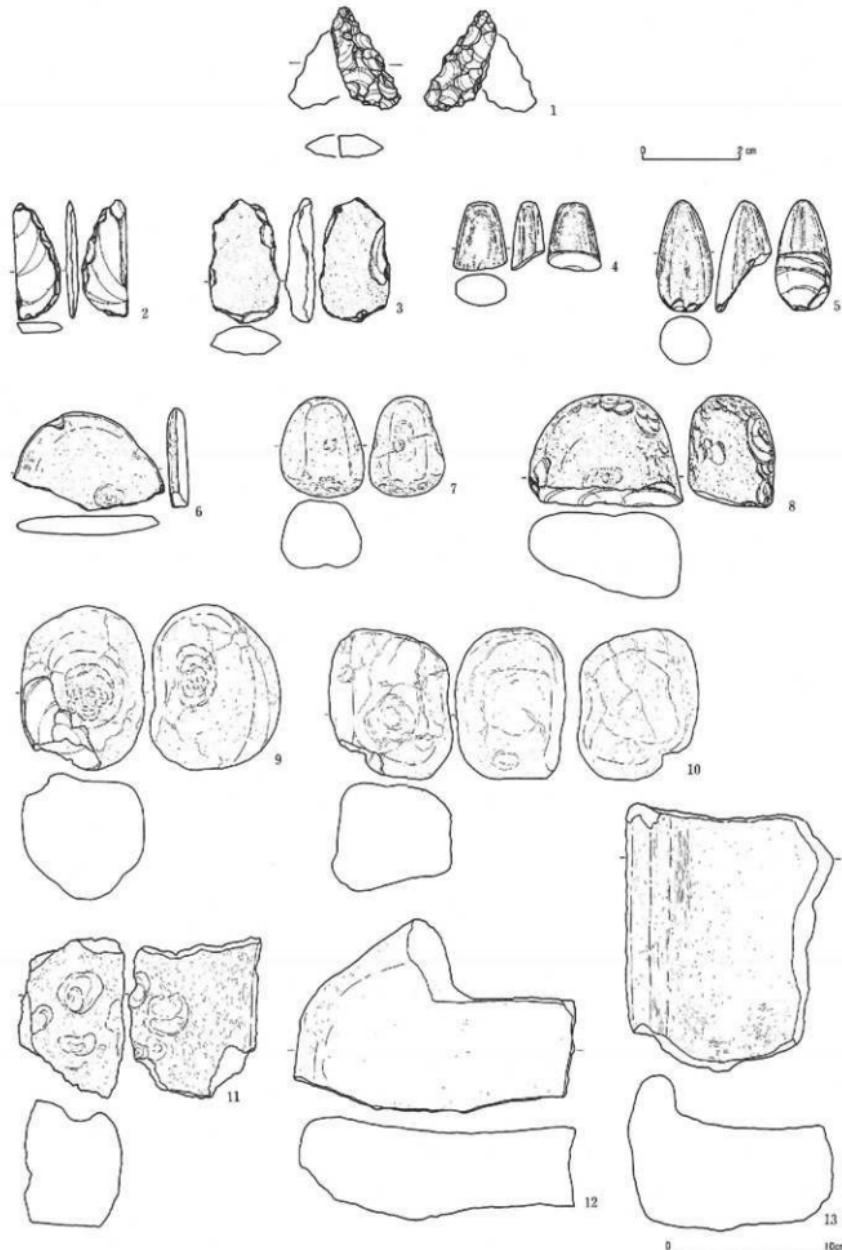
第18図 遺構外出土土器(1) [1/3]



第19図 遺構外出土土器(2) [1/3]



第20図 遺構外出土遺物（平安～中世）[1/2・1/3]



第21図 遺構外出土遺物 [1/1・1/3]

第V章 成果と課題

第1節 横道遺跡における縄文時代の様相

横道遺跡で検出された縄文時代の遺構は、住居址2軒、土坑4基、ピット6基であった。遺構自体は耕作土直下で検出された点や、近世と思われる複数の土坑と重複している点、また、道路状遺構などや流れ込みなど確の移動が見られる点などから本来の姿をとどめているとはいえない。そのような中での第2号住居址の縄石・敷石の検出は貴重である。本調査区で出土した遺物のはほとんどは縄文時代の遺物であった。特に土器片については縄文時代前期前半から後期前半までという比較的の時間幅がみとめられる。

敷石住居について

今回検出された2軒の住居址について簡単にまとめ、子察的検討を加えてみたい。前述したように第1号住居址は敷石住居とみとめられるかについて疑問点は残る。しかし、他遺構との重複などによる遺存の悪さも原因の一つに挙げられ、住居址である可能性が絶たれたわけではない。いずれにしても検出状況から敷石（配石）の配置が埋甕（埋設土器）を意識している点や、埋甕の口縁の位置などからも、埋甕が敷石（配石）に伴うものと見ることについて無理はなく、それらを含めた空間であったことは認識せざるを得ない。

第2号住居址は平面形が不確定であるにしろ縄石が巡り炉から奥壁へかけて敷石が配されている住居址である。堀之内1式期の敷石住居の検出例は県内では比較的多くみとめられるが、典型的な柄鏡形敷石住居址の目立つ時期である。本遺構については入り口部とみられる南東部の遺存状態が悪いため平面形は断定できない。出土遺物は土器片、石器のみで石棒など祭祀性を示す遺物は確認されなかった。また埋甕も検出されなかった。

中巨摩郡において敷石住居が検出されたのは初めてのことである。県内における敷石住居の分布は、主に桂川流域を中心とする東部地域と塩川の支流周辺を中心とする北西部地域に集中し、笛吹川左岸の甲府盆地南東縁地域にも検出例の増加がみられる。住居の所属時期は通常敷石住居の存在が知られている縄文時代中期末～後期末の間に当たる、東部地域においては加曾利E式土器を伴うものがみられ県内における出現の先行性が指摘されている（笠原1996）。同じ中巨摩郡の中でも釜無川右岸の陥西地域と呼ばれる地域においては、八田村で堀之内式期の住居の可能性が高い配石遺構が検出されている。^{※1}極めて狭小な範囲での調査であったため全体像は不明であるが、これまで全く認識されていなかった陥西地域における敷石住居の更なる存在を予測させるに十分な発見例といえよう。また、蓮崎市後田遺跡や長坂町酒呑場遺跡のように県内北西部における曾利式期の埋設土器を有する配石遺構の存在など、本調査区第1号住居址の存在は、住居址ではない他の施設の遺構であったとしても、曾利式期の石を伴う遺構が陥西地域において発見された点で、近年曾利式期の資料が増加している点と併せても、県内西部域において曾利式期における当地域の位置を考えるうえで非常に多くの知見をもたらしたことといえる。本調査区周辺の敷石住居址の展開、銅物師屋遺跡などの集落の変遷や、当該地域の県内における位置づけなど、縄文時代集落の解明を期待させるきっかけとなつたといえよう。

横道遺跡周辺の縄文時代

本調査区周辺地域における縄文時代の痕跡として、本調査区出土土器片についてみてみると、比較的の時間幅がみられることは前述した通りである。細片が多い中で土器の所属時期の判別できたものだけでも、前期前半中越式から、諸穂式、藤内式、井戸尻式、曾利式、加曾利E式、称名寺式、堀之内1式土器片を中心とした出土である。その他には諸穂B式・C式が比較的まとまって確認されているが、遺構は検出されなかった。本遺跡の北西、同じ台地縁辺部に立地する大畠遺跡からは鶴ヶ島台式など縄文時代早期の遺物が若干確認されている。現在までに同じ台地続きではこの2箇所のみの調査実績となるが、いずれも少量ながら縄文時代の各時期を通しての痕跡が得られており、本調査区周辺において、連続と営まれていた縄文時代の集落址の存在を示している。

また、本調査区から眼下に望める鉄物師屋遺跡・ノ木遺跡は、縄文時代中期中葉新道式～藤内式期を主体とした(井戸尻式期所産の住居址まで確認されている)、直径約40mほどの円形空間を挟んで東西に27軒の住居址が並ぶ環状を成す住居址群が検索されており、本調査区以前に営まれていた扇部に立地する集落である。距離的には離れるものの、同じく扇状地上に立地する井戸尻式期～曾利式期所産の集落址である北原C遺跡の存在もあり、当該期前後における集落の変遷ならびに占地に関する検討も今後の課題といえよう。

第2節 まとめにかえて

これまで述べたように、横道遺跡は縄文時代中期末～後期初頭の集落遺跡であると同時に、近世の墓塚、そして果樹畠として利用されるまでの近代以降水田であったことが判明し、土師器片が僅かに1点出土したのみの弥生時代以降中世まで時間的に開きがあるものの複合遺跡の様相を示している。今回検出された構造はそれぞれ碑を利用したものであり、当地の地形的成り立ちと、碑とのつながりを示すものといえよう。本調査区における縄文時代の様相については前節にて記した通りであるが、出土した土器片などからも、周囲に多時期に及ぶ縄文時代の人々の暮らしていた痕跡が存在することを示しており、縄文集落のほんの一部を調査し得たにすぎない。

また、同じあるいは近接する台地上には弥生時代末～古墳時代初頭の集落である大畑遺跡、甲府盆地西部で最古の前方後円墳である物見塚古墳、縄文時代中期～中世までの複合遺跡である上の山遺跡、町史跡である椿城跡、弥生時代末の集落遺跡である上ノ東遺跡、さらには眼下には平安時代巨麻郡大井郷と推測される鉄物師屋遺跡、ノ木遺跡の集落遺跡など、縄文時代のみならず今回検出し得なかった弥生時代以降中世までの人々の暮らしが連続と刻まれている。

また、今回の調査地点を囲むように、周囲には縄文時代及び中世の遺構の存在が予測されている周知の埋蔵文化財包蔵地（横道A～D遺跡）が分布しており、踏査による遺物の採集が不可能であった当地は、厳密に言えば埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったことになる。本来遺跡は現在の行政区画や道路による区画とは全く対応しない分布展開を示すものであり、今回の発掘調査により、当地域における包蔵地の認識を新たにすることとなった。同時にこれまでほとんど手付かずであった漆川と市之瀬川とに挟まれた台地全体に様々な時代の遺跡の存在を予測させることとなった。当該地域における人々の歩みを解明する上で、考古学的、歴史学的に今回の成果により多くの可能性を示したうえに、多くの知見をもたらしたといえよう。

*1 未報告資料であり、八田村教育委員会齊藤氏のご教示による。現在報告書作成中のことである。

引用・参考文献（本報告書全体）

- 笠原みゆき 2001「敷石住居」「山梨県考古學協会誌』第12号 山梨県考古学協会
笠原みゆき 1996「第6節 県内における敷石住居址の分布について」「中谷遺跡」 山梨県教育委員会
笠原みゆき 1999「大月遺跡の敷石住居址について」「研究紀要15」山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
櫛原功一 2000「敷石住居の居住空間」「山梨県考古學協会誌』第11号 山梨県考古学協会
佐野 隆 2001「縄文時代の進化と祭祀」「山梨県考古學協会誌』第12号 山梨県考古学協会
広沢利行 1997「縄文時代後・晚期の配石墓と配石遺構」「法政考古学第23集」法政考古学会
保坂康夫 1999「御動使用扇状地の占地形と遺跡立地」「研究紀要15」山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
山梨県教育委員会 1997「大月遺跡」
山梨県 1999「山梨県史1」山梨県教育委員会
清水博他 1986「上ノ東遺跡」甲西町教育委員会
櫛形町教育委員会 「鉄物師屋遺跡」
櫛形町教育委員会 「ノ木遺跡」
櫛形町教育委員会 「大畑遺跡」

写真図版



北東より



南西より



北東部
—全 景—



検出状況



埋甕出土状況



同 正面より



同 西より



同 左側埋甕



同 右側埋甕



遺物出土状況



同部分



同部分



南より



北より



南西部土坑群セクション



北東部土坑群



13号土坑及び道路状遺構



1号土坑セクション



人骨出土状況



同 遺物出土
状況



古錢出土状況



道路伏道構 北東より



同 南西より



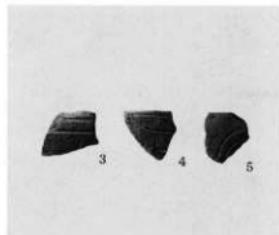
作業風景



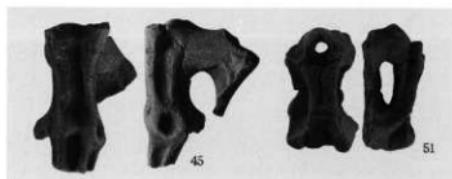
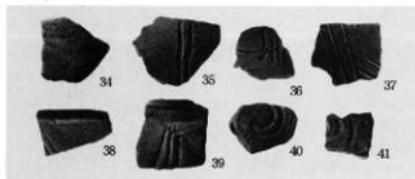
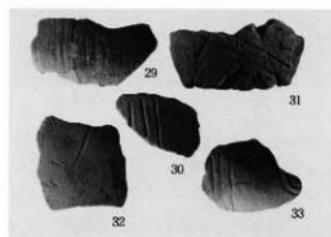
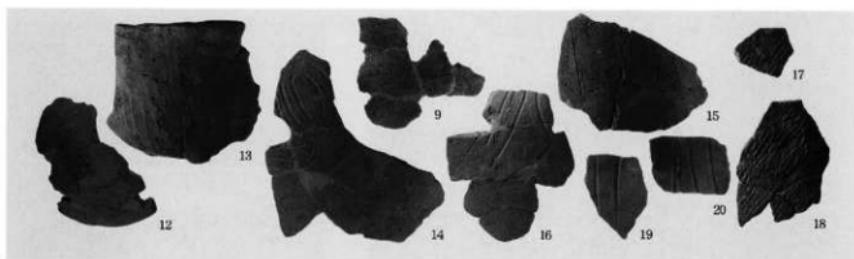
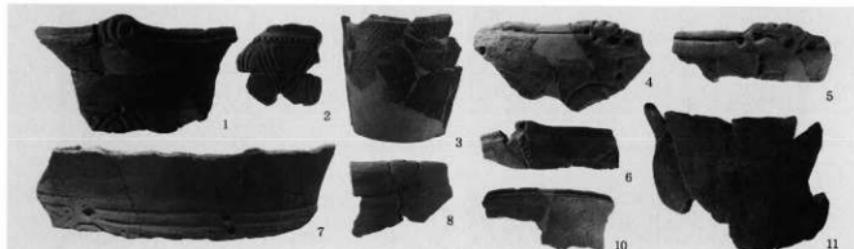
作業風景



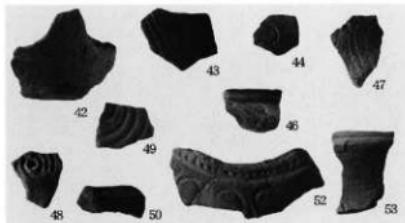
人骨に伴う御供品



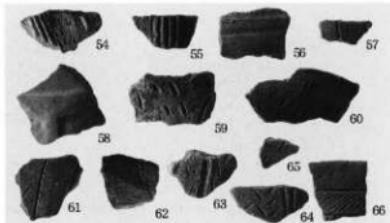
第1号住居址出土



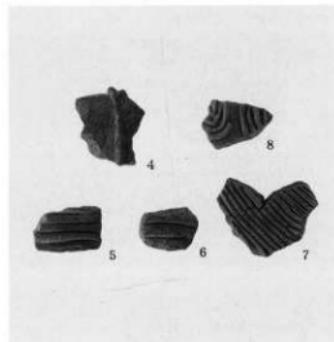
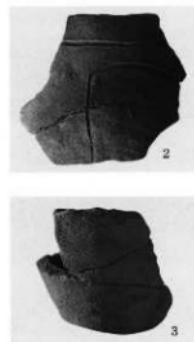
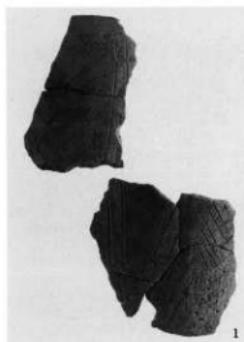
第2号住居址出土
—第2号住居址土器—



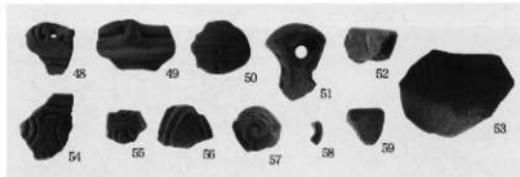
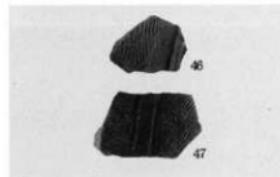
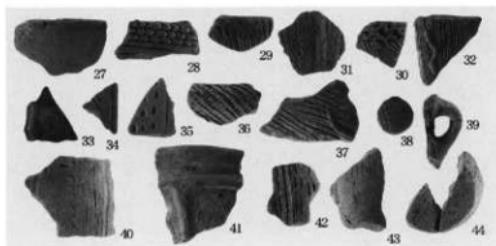
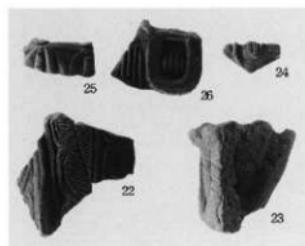
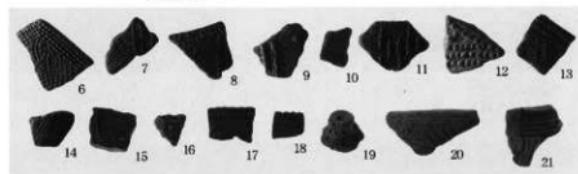
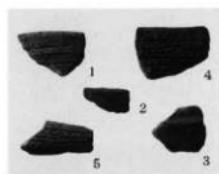
第2号住居址出土



第2号住居址出土

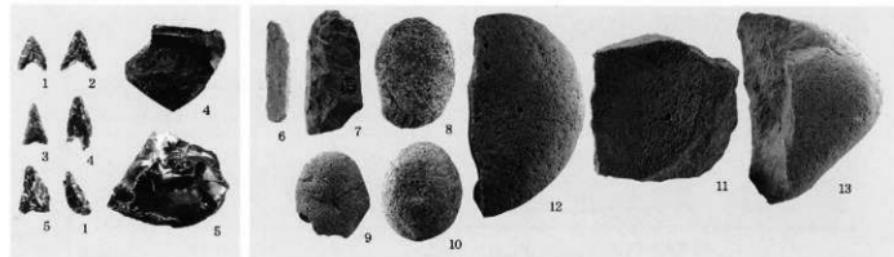


土坑出土



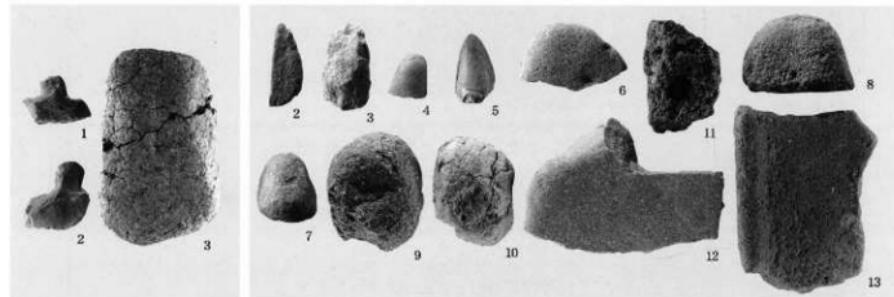
遗構外出土

圖版 8



第2号住・遺構外・土坑出土

第2号住居址出土



土坑出土

遺構外出土

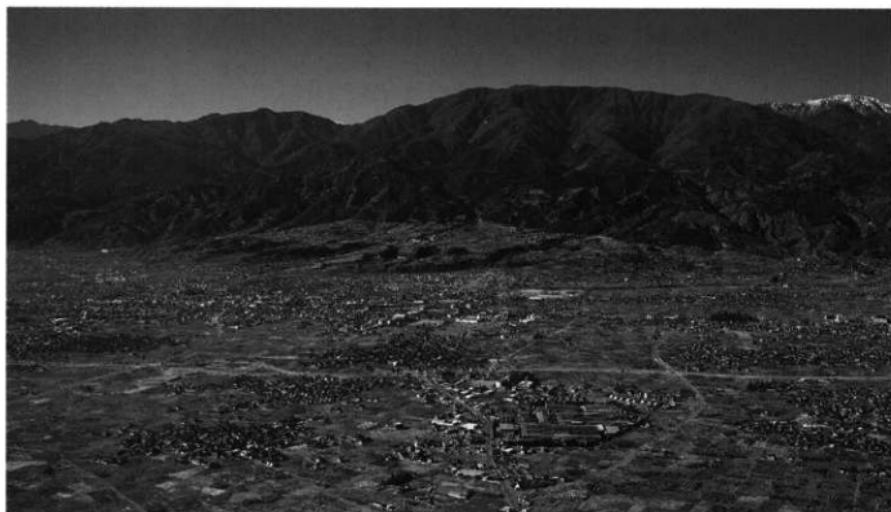


土器

火打金

古錢

—石器・火打金・古錢他—



横道遺跡報告書抄録

フ リ ガ ナ	ヨコミチイセキ
書 名	横道遺跡
副 題	携帯電話用無線基地局設備設置事業
シリーズ	柳形町文化財調査報告 No.22
編著者名	保阪太一
発行者	柳形町教育委員会・ジェイフォン東日本㈱
編集機関	柳形町教育委員会
住所・電話番号	山梨県中巨摩郡柳形町小笠原397-1 TEL (055) 282-0180
印刷所	鬼灯書籍株式会社 長野市柳原2133-5 TEL (026) 244-0235
発行日	2001年9月10日
遺跡所在地	山梨県中巨摩郡柳形町下市之瀬横道69番地他
1/25,000地図名・位置	小笠原・北緯35° 35' 48" 東経138° 27' 29"
主要な時代	縄文時代 近世
主な遺構	敷石住居址（縄文）、土坑（縄文、近世）、土坑墓（近世）
主な遺物	縄文土器（中期）、骨片・古錢・火打金
調査期間	2000年11月6日～11月27日
コード	市町村 193909 遺跡185
調査面積	149m ²
調査原因	携帯電話用無線基地局設備設置事業

柳形町文化財調査報告書 No.22

横道遺跡

——携帯電話用無線基地局設備設置事業——

平成13年9月1日 印刷

平成13年9月10日 発行

発行 柳形町教育委員会
ジェイフォン東日本株式会社

編集 柳形町教育委員会
山梨県中巨摩郡柳形町小笠原397-1
TEL (055) 282-0108

印刷 ほおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
TEL (026) 244-0235㈹

